

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十四卷 第九号 日本幼稚園協会

幼児の世界をさぐる

●その心理と行動の秘密●



子どもの世界が
目のまえに広がる、全く新しい
保育の手引書。

東京工業大学教授

坂元 昂・著

NHKテレビで10回にわたり放映され、好評を博した「おかあさんの勉強室」(講師・坂元昂)をさらにやさしく書き直し、一冊の本にまとめました。幼児のものの見方、考え方、話し方、学び方など、豊富なイラストと写真でおもしろく、わかりやすく構成されています。プクの保育者にとっても、保育上の手引となる絶対の良書です。

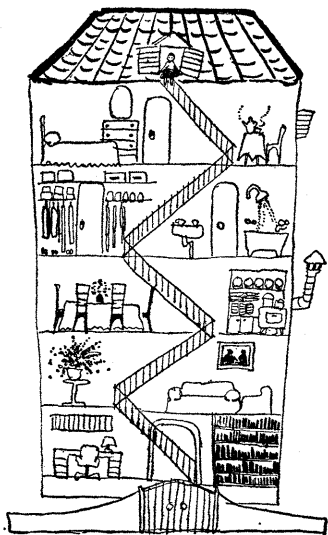
B6判・216頁・定価 1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十四卷 第九号

幼児の教育 目次

— 第八十四卷 九月号 —

© 1985

日本幼稚園協会

胎児経験…………… 勝部 真長…(4)

カナダ・アメリカの旅(一)…………… 津守 真…(11)

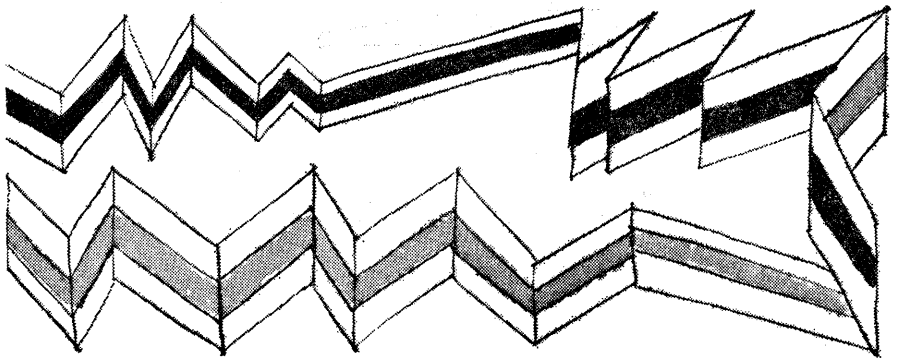
SF的読み解き 子どもという風景

第七回 無垢という神話…………… 堀内 守…(19)

子どもが泣きべそをかくとき…………… 榎沢 良彦…(28)

兔園随筆⑬

秋が来る…………… 蕪木 寿江…(37)



子どもたちのこと……………大橋利恵子…(40)

私が見たインドネシアの

幼稚園と子どもたち 前編……………近藤伊津子…(43)

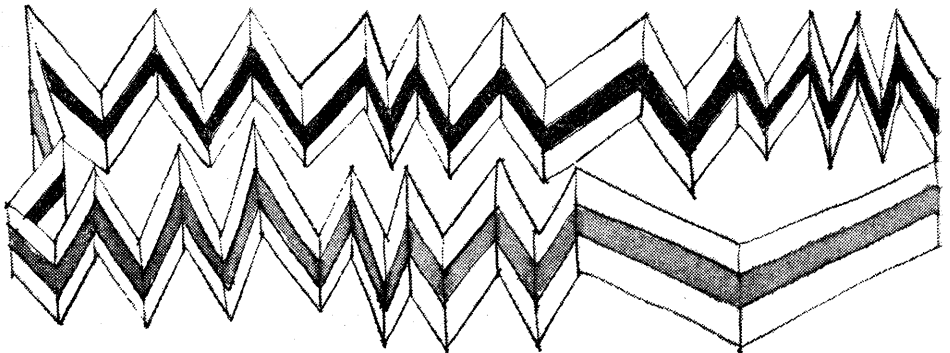
新任のつばやき……………空井 葉子…(50)

教育実習ノート……………(54)

若いお母さんたちへ……………川上 美子…(56)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より

カット・福田理恵



胎児経験

勝部 真長

育児の「教科書」大幅改訂

妊産婦に配られる母子健康手帳というものがある。それと一緒に育児の副読本『赤ちゃん—そのしあわせのために』というのが配られて育児の教科書とされてきたのが、この四月配本分から二十一年ぶりに全面的に書き改められた、というニュースが二月六日付の朝日新聞にのっていた。それによると近年の医学、心理学などの進歩で、育児についての考え方が大きく変化してきたという。

これまでは「赤ちゃんは、はじめからひとりで寝かせましょう。添い寝は、お互いに寝にくいだけでなく、赤ちゃんを窒息させる危険もあります」と否定的であった「添い寝」

を、新版では、「添い寝は母と子のスキンシップの機会にもなるのでよいことですが、首がすわる前の赤ちゃんの場合、お母さんがうっかり寝込むと、赤ちゃんの窒息事故につながることもありますので十分気をつけて下さい」となって、基本的には添い寝を勧めている。

つまりスキンシップの大切さが強調され、また母乳栄養が牛乳、粉ミルクよりまさっていることが見直されてきている。

核家族の時代になると、「おばあちゃんの智恵袋」をたよりにすることもできないので、若い母親がもっぱらたよりにするのは育児書であった。それも大抵は「〇〇博士の育児書」といったたぐいのアメリカの学者の説をそのまま受けいれて、日本の子どもの育児に当てはめているのが一般的な大勢であった。

ところがアメリカと日本とでは社会構造が違うし、家庭の人間関係も違う。アメリカはなんといっても個人主義が原理としてあって、ひとりひとりの自我の粒が立っていて、夫婦、親類でも、個人として一対一で距離をおくのが、その基本的な生き方である。

これにたいしてわが国の社会構造は、土居健郎教授の指摘したように「甘えの構造」なのである。「甘えの構造」とは、そのアメリカで出た英訳が示すように「Anatomy of Dependence」（依頼心の解剖学）なのだ。甘えとは、依頼心、依存心のことである。これにたいして、アメリカ人の心性は Independence（独立心、独立不羈）である。

その独立心を育てるには、赤ん坊のうちからひとり籠に入れて寝かせ、時間をきめて授

乳したり、おむつをかえたりする以外は、一室に閉じこめてドアをしめ、泣こうがわめこうが一切構いつけないで放っておくことが、良い育て方であるというので、隔離方式がとられてきていた。それをそっくり良いことと思ひ込んでまねてきたのが、戦後四十年のわが国のインテリ女性の育児の仕方であった。

ところが本家のアメリカで、育児理論に変化が起つたらしい。少なくとも乳幼児の時期、〇歳から三歳までは、ハグ（抱く）することが大切で、抱きしめることによって赤ちゃんのなかに、母親（たいていは人間一般）にたいする信頼感がわき、情緒の安定がえられるのだ、というエリック・エリクソンの考え方が主流をしめてきて、先年、国際児童年で名古屋にきて話をしたスポック博士なども「私は三度、学説を変えました」と告白したそうである。

そうなると従来、わが国で伝統的な育児法としてやってきた抱っこやおんぶや添い寝のほうは、理にかなっていったということになる。

母親から一定の車間距離をおいて、冷たく育てられ、抱いてもらえずに育つた子どもは、ついに満足に抱かれたことがないという怨念を秘めたまま、大きくなり、両親にたいして不信感もち、情緒不安がいつまでも抜けない。いわゆる白けた心のままで思春期を迎える。こういう子どもは、非行や家庭内暴力や登校拒否に走りやすいともいわれる。

刷り込み理論

この頃の産婦人科病院では、赤ん坊が産まれるとすぐに母親のところへ持ってきて、抱かせたり手に触れさせたりするようになってきた。以前は赤ん坊を母親からひき離して、しばらく預って、きれいに洗ったりふいたりしてから産婦に対面させるというやり方で、対面するまでに少し時間がかかったものなのに、そうでなくなったのは、やはり新しい理論が背景にあるからだと思われる。

オーストリーの比較行動学者で、マックス・プランク研究所にもいた、ノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツ博士は、自邸でたくさん動物を飼って観察、研究しているので有名である。彼の研究に刷り込み理論というのがある。アヒルとかガチョウのヒナが生まれると、すぐに母鳥からひき離して、玩具のゼンマイ仕掛けのセルロイド製の母鳥らしきものを動かしてみせると、ヒナは一所懸命になってその動くオモチャのあとを追いかけ、ついて廻るといのである。しばらくそうしておくと、それが癖になって、今度は本当の母鳥をつれてきても見向きもしないそうである。つまり赤ん坊は、この世で一番最初に接したものに愛着を覚え、それにひかれる。インプリンティングが行われる。刷り込まれるのである。

生れたばかりの赤ちゃんの扱い方が、一生を方向づけるといっても言い過ぎではない。

京都大学の園原太郎氏らの研究によれば、生まれて三、四日目の赤ちゃんが、両手、両足

を大きく開いて、それを次に両手を合掌するように合わせて、両足も合せるようなしぐさを
をするそうである。また一週間か十日目ぐらいで、小さな口をほころばせ、いかにもスマ
イル（微笑する）の恰好をしてみせる。よく見ると仏像の柔和な笑顔にそっくりにみえる
そうである。

赤ちゃんは、人間として何でも解っているのではないかと思われる。ただ口に出して言え
ないだけで、その無意識の領域ではすべてを感受しているのでないかと思われる。

胎児経験

すでに胎児として母のおなかにいる時、外界で音楽レコードをかけていると、それに耳
を傾けているのが、レントゲン撮影で知られる。そうして生まれてから、その赤ちゃんが
泣いている時に、先刻の音楽レコードを聞かせてやると、とたんに泣きやむそうである。
つまりなんらかの記憶があるのである。

そこで私が思うのに、胎内にいる時が、人間にとつては、パラダイス（楽園）として記
憶に残り、一番安楽なたのしい時期として心に刻まれているのであるまいか。なぜなら、
胎児は飢えるという心配がない。たえず臍の緒を通じて母の血液が流れこんでくるのであ
るから、点滴をうけているように栄養は満足させられているのである。第二に、胎内では
羊水に囲まれて、一定の温度を保っているのであるから、暑さ寒さの心配というものがな
い。こんな安楽な状況というものは、安心しきっていられることは、一たん外界にとび出し

てしまうと二度とえられないのである。

この娑婆に出てしまうと、つねにひどい思いをしなければならない。子どものことをガキ（餓鬼）というが、いつもおなかをすかしてオッパイを求めて泣いているのである。また暑さ寒さという外界の気温に適応しなければならぬのも、赤ん坊にとっても苦勞であつて、少し厚着をさせれば鼻のアタマに汗をかき、少し蒲団を薄くしてやれば、すぐ風邪をひく。そういう意味で、この世は苦の世界なのである。

とくに胎内でくるまれて周囲をしつかり囲まれていた、あの安定感、安心感にひきかえ、この世に放り出され、ひとりぼっちでいることの不安感、頼りなさ、心もとなさは格別のものであろう。だからこそ赤ちゃんにかぎらず子どもは、つねにスッポリと抱かれたく思い、くるまれたく思い、「抱っこ」「おんぶ」を求めてやまないものである。

成人になった私自身を顧みても、やはり夜になって自分の蒲団にもぐり込み、手足を伸ばした時の安心感、くつろぎというものは格別のものに感じられる。昼間、外界にいる時の警戒心や防衛機制がはずれて、非常にリラックスし、自律神経もゆるむ思いである。

さらに風呂や温泉につかったときの、あの伸び伸びした「ヤレヤレ」といった快感はなんだろう。一定の温度の水につかって神経のほぐれた状態での浮遊した感覚は、もしかすると羊水のなかに浮んでいたときの胎児経験を思い起しているのではないだろうか。

だから子どもと一緒に風呂に入つて、お互いに警戒心をなくした、素直な状況でのコミュニケーションは、教育的に意味のあることなのである。戦前のわが国には銭湯がいたる

ところにあった。風呂での裸のつきあいは、地域のコミュニケーションを深め、地域社会が今ほどトゲトゲしくなく、和気藹々としていた。アメリカには、新興宗教が盛んであるが、とくにカリフォルニア州にそれが多い。近頃、ロスアンゼルスあたりの新興宗教の写真に、大きなタライのような湯船に、四人または六人の男女が混浴している風景が映されている。これも孤独な個人主義を克服するための一つの方法なのであろう。

以上のべたことは、〇歳から三歳までの乳幼児にとって抱擁ということが欠くべからざる人間形成の手続きであり、人間的信頼の現であるということを強調したかったのであるが、考えてみれば、子どもだけでない。われわれ成人もまた抱擁なくして生きられないのである。抱かれない、抱いてほしいということは、人間の痛切なる願望である。

そしてその願望は、実は胎児経験への追憶なのでないか、というのが私の推測なのである。

(お茶の水女子大学名誉教授)

カナダ・アメリカの旅 (一)

津守 真

保育の仕事は、時間的に縛られることが多く、空間的にも子どもからはなれることができず、肉体的にも限界に遭遇する種類の仕事である。このことはどんな仕事にも共通することであるが、保育においては、特に具体的にこのことを感じさせられることが多い。それを束縛ということばで考えたとすると、一面的になる。実際には、保育の場は、大人と子どもとの間にさまざまなことが行われ、その中でそれぞれが自らの人生を生きている豊かな現実である。それは、子どもの人間的成長を中心として、そこに参与する人々すべてが、人間として形成

されることを課題とする。保育は、日々直接に子どもの成長を助けつつ、人間の文化をそこにつくり上げてゆくとする、能動的な精神の営みを根幹とする。そこでは、実践と学問、思索と理論とは切り離しがたい。保育の実践を支える学問、実践の思索に基づく理論の形成は、この現代に、子どもの仕事をする者にとって、共通の関心ではないだろうか。

このようなことを考えていたときに、カナダのエドモントンで、第四回の Human Science Research Conference (人間科学研究会議) が開かれることを知ったので、こ

れに参加することにした。これは、現象学的教育学を志す人々の集まりである。もともと、保育は人間の現象であるから、ことさらに現象学的と規定する必要もないように思われるし、それをひとつの学派と考えるならば、それは狭義になりすぎる。そのような考えが、ランゲフェルトその他、この学問を推進してきた人々の中にあつたからであろうか。各地に同じ考えの人々が散在しながら、これまでひとつの学会や組織が形成されることがなかった。今回のこの会議においても、その開催校である

アルバータ大学のファン・マンネン教授は、その歓迎の辞の中で、「われわれは単にゆるく結ばれたグループなのか、あるいははからずも形成することとなった人間科学の学会連合体であるのかはきめがたい」と述べている。私は、このような開放的な態度に好感を覚える。眞実は、ひとつの学派や団体が占有すべきものではない。同じ考えを持つ者が、互いに知りあつても、全く同じ考えの者は一人もなく、共通の根幹において、「ゆるく結び合う」のみである。しかし、現代のように、実証論理

的方法論だけで、自然をも人間をも切り刻み支配しようとする傾向の強い時代に、学問としても子どもという対象を研究者、教育者から切り離すのでなく、人間の全体の中で見てゆこうとする考えの人々が、共通の場を作ろうとするのも当然の動きであろう。

今回、私がこの会議に参加して見聞したことからはじめて、久しぶりに、カナダ、アメリカを訪問した体験と感想を記したいと思う。

人間科学研究会議

ヴァンクーバーから飛行機で約二時間、平原の上をこえて、カナダでも最北端の市、エドモントンに着いたのは、すでに夜の十一時過ぎであった。翌日は、朝から快晴で、カナダの五月末はすでに真夏である。あらゆる花々がいちどきに咲き盛っている。こでまりに似た花、りんごのような白い花など、いずれも似ていても日本の樹木とは違う。宿舎の学生寮から、広々とした緑のキャンパスの中を歩いて会場の建物にゆく途中、この広い場所

に、あの子ども、この子どもを連れてきたら、どんなだろうかと何度も考えた。

会議は、五月二十一日火曜日の夜から始まった。名前を登録し、ワインとチーズをとりながら互いに会話を交す。この大学の大学院学生である中年の婦人が、遠来の客をもてなすためか、あるいは私のレポートのアブストラクトを知ってか、この市の幼稚園が、遊び、人間性等をことばでは標榜しながら、実際には時間割で子どもを追いかけるようなことをしている、どうしたらよいのだろうかと話しかけてくれる。オランダから、ユトレヒト大学のベークマン教授の、ジーンズ姿で白髪をふり乱しての風ぼうにも数年ぶりで接した。

会議は全体会の講演とシンポジウム及び、個人発表から成っている。個人発表は一人四十分で、フッサール、ハイデッカー、メルロポンティ、ヘーゲル、アルント、サルトル、ディルタイ、ソクラテスと名付けられた部屋の教室で同時に行われる。その中から私に印象深かったことを中心に記すことにする。

混乱の時代の子どもの悩みの源流と、安定感の抛りどころ

五人の報告から成るこのシンポジウムで、最も感銘を受けたのは、司会者であるアリゾナ州立大学、アオキ教授のイントロダクションであった。子どもの世界への問いと題して、次の点が指摘された。子どものことについては、従来多くの研究がなされてきたが、子ども自身の側からの見方と、子ども自身の考え方については研究がきわめて不足している。研究者は、子どもの世界を研究すると言いつつ、その周縁をかするだけで、表面的である。大人は幼児について勝手にいろいろのことをいうが、子どもの内側からの見方については無知である。子どもの保育、福祉、発達に関心をもつ者は、子どもの現実にまじめにとりくむことが要請されている。そのためには、次の点が検討される必要がある。

- 研究における抽象化。理論化をいそぐあまり、子どもの世界の重要なことを、網の目から落している。
- 観察と解釈とを分離。客観的観察を重視しすぎ

て、主観的解釈を排除するあまり、意味が失われる。

○ 専門家の独善。専門家は、素人が近づくことのできないことを知っているとする傲慢さ。

○ 多様な側面から見ることの必要。子どもの世界は、ひとつではなく多くの側面から見ではじめて理解される。

○ 透明な眼をもつことの必要。さまざまな偏見や先入観を除いて、自分の眼を透明にすることが、子どもの研究者に要請される。この点については、東洋には、伝統的に、こうした態度があるのではないかというところが論じられた。

フーストン大学のレンツ教授は、子どもの悩みと遊びの再生産力と題して、現代の子どもが受けている貧困、病気、暴力、戦争、死、離婚などによる悩みは、良い家庭、良い学校、遊びの回復という、一見単純なことに還元されるという。しかし、これらのことは、あまりにあまりまえないので、大人から見逃されてしまう。遊びは、自分自身になることであり、創造し、また再創造する。

遊びとは、おうちごっこ、人形あそびのような名前のつく遊びだけでなく、むしろ形のない遊びがその本質をなす。

若い研究者のパーケイ氏は、シカゴの学校で教師としての体験から報告をされた。私は今回の旅で、この後、シカゴにいったが、日本とは違った都市の教育問題を垣間見て、現実実践と研究を進めてゆく際の困難さを推察した。

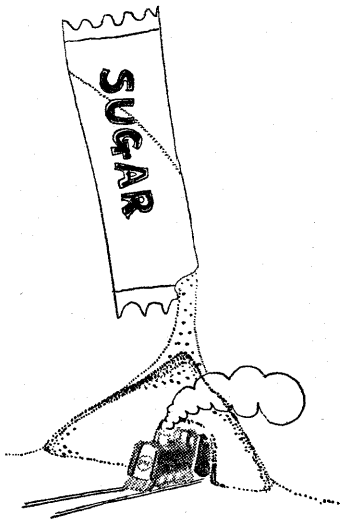
ヤマモト教授は日系の学者であるが、今回、私は、日系の学者が、ことに教育の分野で、良い活躍をしておられることは印象深かった。アルバータ大学でも、教育学の主任教授は、昨年まで日系のアオキ教授だったことは、ここにきてはじめて知った。そのアオキ教授の司会のもとに、コロンビア大学のマクシン・グリーン教授は次のような講演をされた。それは、この会議の基調講演のひとつと考えてもよいものであった。

教育実践の理論——そのはじまりと可能性

過去二十年間に、教育実践について、数多くの批判的理論が展開された。それらに共通のことは、実証的立場をしりぞけ、人間の意識と生きた体験に関心をもったことであつた。教師は自らが能動的な著者であること、感覚を失いつつあるのが現代である。教師が他人によって操作される教育技術主義から脱し、その犠牲となることを拒否するのにはどうしたらよいか。想像力と解釈力が回復されねばならぬ。若い人々と心を開き、彼らがま

だ手にしていかないものに向つて力づけるために、それに必要な理解力を必要としている。しかし、現代の圧力のもとで、教師は生徒と共に未来に向つて生きることがいかにしてできるだろうか。彼らはいかにして子どもの可能性を見出し、それを追求することができるだろうか。

子どもと共に自分も年をとりながら、教師は世界の欠落を次第に補つてよりよくさせることができるのだろうか。教師は子どもに対して心を開くことにより、子どもにも自らを開いて生きる態度を教えることができるのだ



ろうか。そして互いに自らを変容する者となりうるか。いかにして。

年輩の女性の哲学者であるグリーン教授は、講演の間も、長身にパナマの帽子を頭にのせ、背筋を伸ばして語られた。デュニーのもとに学び、哲学的遍歴をへて、現象学に到達し、現代における教育学は、人間性の守り手であるとの認識に至った。そのことを雑誌の上で読んでいた私は、実際にその風ぼうに触れて、印象を新たにしました。個人が常に強風に曝されて立つ西欧の社会で、思想の根底において時代の潮流に抗して立つのには、常に自らを励まし、際立たせる必要があることは、島国に保護されて育った私共が推察する以上のものであろう。

言語をこえて——表現できないものの表出について及びその現象学的研究の効用

オランダからの若い研究者が数人あり、いずれも興味深い報告であった。これはユトレヒト大学のディンスケ女史の報告である。

忘却が記憶を前提としてるように、表現できないことは表現との関連においてのみ存在する。一方の存在は対極の他方の存在を前提としている。暗黒は光の欠如態ではなくて、それ自体の中に存在するものがある。表現できないものは、実際に存在しているものの現象である。デカルト流に言えば、表現されないものは否定され無視されるのであるが、言語で表現されえないことの中には多くのことが含まれている。このような序論からはじまって、ファン・ウドスホーンという作家の書簡文学を題材にして論を進めるのであるが、子どもの問題にも共通なものを感じさせられた。後で話したところによると、ユトレヒト大学でフェルメール先生のもとで臨床の實習をしてきた人であった。エディット・フェルメール先生は、この雑誌に何度か書いて下さったことがあり、馴染みの方があると思う。

これと類似した研究に、インタールヴェーを超えて——現象学的研究による自己表現の研究という報告があった。テッシュというサンタバーバラの人である。インタ

ーヴューは、他人の体験を知るのに良い方法であるが、幼児や障害児などは、生を生きただけで、言語的反省は少ないから、この方法を用いることはできない。世界の中にあることと、それについて語ることは同じことではない。赤ん坊が泣くのは直接体験の自己表出であるが、反省を経た自己表現ではない。それでは行動にあらわれた表現を、子どもの体験の表出として理解するには、どうしたらよいか。それは私共と共通の課題である。

三日目に、講演や発表の合間に、アルバータ大学のシュミット教授が私のところにカードを持ってこられた。オランダのランゲフェルト先生が、一昨年は夫人を亡くし、昨年は娘さんを癌で亡くされて、苦境の中にあるから、先生を知っている人たちの間をまわって寄せ書きを集めているのだという。シュミット教授はすでに退官されているが、長年ランゲフェルト先生と親交があり、先生が日本にこられ、お茶大で講演されたことも知っておられた。この会議には、ランゲフェルト先生を知ってい

る人が数多く、ドイツのミュンヘン大学のヘルムート・ダンネル教授は、ランゲフェルトの著書をオランダ語からドイツ語に翻訳された人でもある。シュミット教授自身は、ウィリアム・シュテルン（一八七一—一九三八）——世界観、世界、研究法についての省察と題して報告をされた。シュテルンは、幼児期の心理学という古典的な書物の著者であり、私が大学生の頃から知っている児童心理学の創始者のひとりである。人間的洞察力をもって幼年期を考えており、現代に再読される価値がある。

シュテルンは、ランゲフェルト先生の恩師にあたる。最終日の最後の個人報告の部で、オランダのライデン大学のベルケラール女史が、方法的問い——現象学的研究に経験的方法を用いることができるか、という報告をされた。これは、ライデン大学の子どものクリニックでなされた障害児、自閉症児の臨床の資料にもとづいている。考え方として、障害児の臨床において、障害に着目するのではなく、障害を受けている子どもを育てることを考えるのであることを強調して述べられた。私はそ

の点で同じ考えであるので、心強く思った。そのような見方での臨床体験から、障害をもつ子どもの特色として次のような分類を試みていた。「1、社会性、a、関係の欠如、b、言語の欠如、2、身体性、a、顕著な運動面の現象、b、顕著な感覚面の現象、3、解放性、a、変化への抵抗、b、極度に不合理な恐怖」これは実際体験にもとづいた分類のように思われる。現象学的教育学は、ともすると哲学に偏して、実践が稀薄になる傾向になる危険があり、子どもの世界そのものに着目し、それを尊重する実践がしつかりとなされている報告には共感を覚える。ベルケラール女史も、後で話をしたところ、ユトレヒト大学でフェルメール先生の指導を受けた人であることを知った。

エドモントンのダウンタウンからは、サスカチュワン河を隔てた丘の上にある広いキャンパスの中で、朝八時半から夜にいたるまで五日間にわたる会議を終えて、私は、実践を尊重する理論をつくり上げようとする人々

が、世界の各地に生れつつあることを思い、心強く感じた。このような人々は、団結して動くことはしないだろうけれども、ゆるく結び合い、それぞれの場所で、子どものための戦いをつづける人々であろう。

カナダの五月の夜は、十時になっても、青空に太陽が輝いている。ほとんど眠る暇もなく、翌日の朝五時に宿舎を出て、妻と共に、アメリカのシカゴに向った。シカゴ大学のベッテルハイムの学校を訪ねるためである。

(愛育養護学校)

S F 的読み解き

子どもという風景

第七回 無垢という神話

堀内 守

1

見方と見え方

文学に子どもが主人公として登場するようになったのはそんなに古い話ではない。そのなかで「子ども」に言及している作品はずっと以前からある。しかし、小説であれ、詩であれ、劇であれ、子どもが主人公になって全

体を動かすというようなことはなかった。

世界の文学の流れをざっと比較してみると、この面では先端を切ったのはイギリスの文学のようである。時代は十八世紀も後半になってからのことになる。

すでに産業革命が進み、世の中の動きはそれまでにない急テンポで動きはじめていた。感情と思考の深いところに及ぶ大きな変化が生じてくる。人口の移動も激しくなる。都市の生活が活発になりはじめ、大衆作家が人気

を得る反面、詩人は軽んじられはじめる。世の中全体の景気が人びとを不安に陥れ、浮き足立たせる。

要するに、作家たちの孤立と疎外、疑惑と知的な葛藤が生じていた。彼らは世の中の動きをまことに不愉快な姿になっていくものと見ていたのである。機械、煙突、煙、騒然たる人間の群、汚れた道路と悪臭のする貧民街がたえず彼らの超過敏な神経を焦ださせた。

「子ども」はこんな動きのなかで「自然」のシンボルに仕立てあげられていった。作家たちは、人間の「無垢な」魂に憧憬を寄せ、「子ども」のなかに傷つき易い気持と不安を解消させていったのである。

自閉の内なる無垢

疲弊した文化のなかで生じる精神と感情の混乱から逃れるために、作家たちは、生きている子どもたちよりも、幻想的な「子ども」というシンボルを創り出し、そのなかで感情的な抵抗感を最少限に抑えるという道を見出したのであった。郷愁と退行衝動は、この時代にはロ

マン主義という衣裳を着けた。「子ども」は、成長と発展のシンボルになることもあった。しかし、自己回帰と自己憐憫のシンボルになることもあった。

以下、この動向を大まかに展望しておくことにしよう。

感情の礼讃

ロマン派の「子ども」像が形をととのえるにはルソーの『エミール』からワーズワースの『序曲』にいたる五十年が必要だった。十八世紀と十九世紀の時代思潮の対立のなかからその子ども像が生まれたといってもよいくらいだ。「理性」と「感情」の対立という主題がそれぞれある。

世界を見る窓口が変わったのである。それまで、「理性」という、透明な、冷やかな眼が讃えられていたのに、いまや「自然人」（ルソー）、「ヴィジョン」（ブレイク）、「想像力」（コールリッジ）、「人間性」（バーク）などが窓ガラスに色づけを開始する。

すると、それまで「理性」以前の存在として、裏舞台に押し込まれていた「子ども」が急に大きく見えてきたというわけである。ただし、そこにあらわれた「子ども」は、それを見る人の心がつくり出した自己の理性像だった。「子ども」は、彼らと世の中の関係を和らげてくれる緩和剤のはたらきをしたのである。

「子ども」が主人公になると、「涙」も主人公になった。「理性」を主人公にしていた時代には人間は泣くということがなかったかのようにであったが、「子ども」の発見とともに「涙」も発見された。悲しいといつては涙を流し、嬉しいといつては涙を流す。「涙」についての記述が急が増す。その前の時代の作品を読んできて、ここまできると、何だか急に雰囲気が変わったような気になるのもそのためであろう。これを少々キザっぽく、そしてやや誇張して表現すると、こんなことになるだろう。それまではデカルトの「われ考える。ゆえに、われあり (Cogito, ergo sum)」というのが脚本の作成方針で、子どもは白紙にたとえられ、教育を施すことよって、その

白紙に何でも書き込みうると信じられていた。それなのに、こんどはルソーの「われ感ず、ゆえにわれあり (Je sens, donc je suis)」に変換されたのだ、と。

人間の行動の素朴さと天真らんまんさを希求する動きは、原始の人間を善意と同情と相互扶助にあふれた人間像に仕立てあげた。だれも、それを推論でつくり出していった。これを促進させたのは、文明社会の退廃的腐敗（と彼らが見なした）現実である。もっとくわしく言えば、「文明社会の腐敗」とは、商業、工業、金銭、法律、仕事等にまで及んでいた。

ルソーの『エミール』の強調しているのもそれである。人里離れた田園生活のなかでエミールは家庭教師をただひとりの相手として育てられる。こういうテーマを展開するにはたしかに「ロマン」というジャンルは有効だったが、ロマンという面に期待をいだき過ぎると、この作品は退屈である。叙情味のある文章、特異な修辭のゆえに『エミール』は別の意味で面白く読めるが、そこに書かれていることをそのまま実行しようとはだれも考

えないだろう。

流行あるいはエミール現象

教育史の本にはほとんど登場しない裏話を紹介しよう。ルソーの思想はイギリスに受け入れられ、たちまちのうちに流行になった。ただし、問題はその流行の意味にある。似たような本が書かれ、似たような主人公を氣取った人びとがあらわれたということである。

『エミール』に書かれていることをそのまま実践しようという無邪気な人もいた。短期間にやろうとしたためか、子どもたちをせっかんし続けたという話も伝わっている。なかにはエミールの妻になるべく教育されるソフィのイメージに惚れこみ、あんなに心やさしく、しかも知的な妻をもちたいという若者もあらわれた。（『ソフィ』には「英知」という意味があるのです）。本気で実行しようとして、養女をもらった上、理想の妻にしようというのである。

こうなると、いささか奇行というべきだが、流行には

いつでもそういう面がある。

「自然」がルソーによって、ワイルドな自然から和な自然に観念の上で変換されたものだから、それに追隨し、「自然」礼讃の風潮も生まれた。文学史の上ではマイナーな作品として無視されていたり、軽くあしらわれたりしているが、ほどよく抑制された感情をもとに、氣取てのよい人気ばかりを描く小説もたくさんあらわれている。作者は主に中流階級の女性である。彼女たちの名譽のために、その名前をご紹介しておく。フランシス・ブルック夫人、インチポールド夫人、ペイジ・スミスおよびシャーロット・スミス姉妹等。（ピーター・ガウニージ）

・ 江河徹監訳『子どものイメージ』紀伊国屋書店、42ページ

2

教化的な書物にあらわれた子ども

同じ「子ども」像でも、当時の布教パンフレットに描

かかれているものは、もっと教化的な文脈で描かれている。当時の子どもの状態は、多くの宗教家の心を痛めさせるものであった。従来の手工業の中の従弟制度は衰えていき、弱年労働力は産業のなかに組み込まれていく。貧民の子どもがどんどん搾取されている。それを救済しようとして「日曜学校」運動が生まれた。十八世紀末のイギリスではこういう布教パンフレットがたくさん出され、配布されている。

そういうパンフレットをもとに書かれたのがトーマス・デイの手になる『サンドフォードとマーティンの物語』である。書かれたのは一七八九年ごろだが、出版されるとたちまち版を重ねた。テーマは子どもの徳行である。物語の筋は単純だ。ある子どもが別の子どもの感化をうけて更生するという物語だ。誠実な行為はかならず誠実という報いがあるとか、貧しい人はかならず心が清らかだとか、この物語の中に出てくるおとなは気高い心の持ち主が多い。

けれども、もう少し丹念に見ると、この種の物語が人

気を得たのは、子どもを対象にしてというよりも、読者をおとなに想定し、誠実であればよき報いのあるという信条を、誠実であれば損をしないと読み替えるように数々の場面を設定したからではなからうか。

だから一歩あやまると、でしゃばり、尊大、偽善というような行為を教唆しかねない面ももっていた。

その面を衝いたのがロマン派の作品であった。ロマン派の人びとは、誠実さが功利的に解釈されることに警告を発していたのである。

教化を強調する人びとは、ロマン派の「子ども」像のなかに「ひ弱さ」を見た。この双方の公然、非公然の反目はその後も続いていく。

「子どもはおとなの父親」

ワーズワースの詩のなかで、多くの人びとの耳に残っているのは、ワーズワースがその作品のなかでうたっている「子どもはおとなの父親」という表現であろう。すっかり知られてしまい、もうあまり衝撃力はなくなつて

しまったように見えるが、この一句は「自然」と対になった「子ども」の姿、ワーズワース自身の経験を普遍化しようという意欲にささえられて、強い喚起力をもった。

彼にとつては「子ども」とは魂の種をまく期間だった。そういう表現によって、ワーズワースは当時の人びとの感情の向かう方向を修正しようとしたのであった。

無垢で、大らかな「子ども」像は、慈愛のある「自然」あるいは「母」なる自然に抱かれているものとして描かれた。子どもはそこで眠り、あるいは遊戯をし、夢にひたる。

しかし、「子ども」が成長すると、どうなるのだろうか。右のような「子ども」像が支配的になると、子どもがおとなになっていくことはネガティブな文脈でとらえられざるをえなくなる。夢は消える。遊びの世界も消える。そしてこの世の重荷が背にのしかかってくる――。

主情主義

ワーズワースの詩集『序曲』は、ある意味で教育論で

ある。知ったかぶりの知識をあざ笑い、山あいを元気にかけめぐる少年少女を描き、「自然」との感情的な交流をねがった。

その主情主義は、つねに歓喜にあふれた子ども、非日常的な世界に戯れる子どもを讃えた。つまり、子どもの驚異の念、喜び、想像力を喚起することが教育の重要なはたらきとされたわけである。

同じ時期に子どもたちの実態は、産業に関する女王の勅定委員会の手になる調査が何回も明らかにしていた。この調査報告の内容は凄じい。特に一八四二年の青年および児童に関する雇用の実態を調査した答申は、チャールズ・ディッケンズの小説『オリヴァー・ツイスト』（一八三八年）の世界とダブるものだった。

ディッケンズの作品はヴィクトリア朝時代のイギリスの子どもの姿を概観する有力な手がかりを与えてくれる。彼の関心は子どもにあった。子どもへの関心が彼の想像力を刺激したのである。そしてディッケンズは、この世の根本的な対立としての善と悪の対立が子どもにど

のような影響を与えるかという観点から子どもを描いたのである。

鉄道は故郷を変える

詩人たちが主情主義に描いた世界をディッケンズは小説というジャンルによって克明に描写した。詩の世界においては、悲惨でさえも美しく見えてしまうということがある。しかし、小説においては、悪はある人物を通して表現されるだけでなく、ある制度を通して具現するものであることを描くことができる。ディッケンズの方法はこの実験でもあった。

この時代は鉄道の発達が顕著な時代である。鉄道網はわずかなあいだにイギリスの風景を変えていった。ディッケンズの作品にはその鉄道が、鉄道ホテルを建てさせ、コーヒーハウスを増設させ、さらに鉄道地図、一般の地図、ひざかけ、飲み物、サンドイッチや時刻表をふやし、さらに時計が必要になっていく悲喜劇をよく表現している。

それはまったく新しい風景だった。若いころのディッケンズが知っていた家や庭や教会は風景の中心ではなくなっけていき、いまやステーションがその土地の中心になっけていったのだから。

この風景の転換は詩人の表現にはあまり見られなかったものである。テーマは都市開発に移っていったのだ。ディッケンズの小説は、十九世紀中葉のこのような苦境を「子ども」の眼を借り、「子ども」の身を借りて表現している。

3

『ハード・タイムズ』

何と訳そうか、迷う題である。『ひどい時代』『酷なる時代』『めちゃくちゃな時代』『不景気な時代』。どれも一面しか表現できないような気がする。『ハード・タイムズ』の首と意味の双方に目を向けると、やはり一工夫必要になってくるのだ。現に『世の中』と訳した人もいる

(豊島与志雄)。

教育史ではこの本はあまり取りあげられないし、文学史の上でも似たような傾向にあるらしい。だが、この本は、子どもの環境としての教育が中心テーマになっている。もっと重視されてしかるべきだと思う。

さて、その作品だが、それは学校制度だとか教育内容などに言及した本ではない。むしろ、学校という制度が子どもの心身に対してどのような影響を与えるかを遠慮会釈なくあらわにした作品である。

学校でもっとも無防備なのは子どもたちである。無垢な子どもほど不幸に影響され易くなっている。しかし、よくもまあ、このように続々ととんでもない教師たちをたくさん登場させたものだ。まったく、これでもかこれでもかといわんばかりに無知で、残酷で、偽善的で、生徒に体罰を加えることによるこびを感じているような輩を登場させてくる。

理想の学校

そういうとんでもない教師や学校を描写することがディッケンズのねらいではなかった。むしろ、さんざんこういう学校を描写したあとで、まるで世界が違ったかのように、理想的な学校がさわやかに叙述される。信頼、秩序、親切、自由にあふれた学校として。

ただし、こちらの方は薄味であって、リアリティがないのが残念だ。そういうものだろうとも思える。

小説としては、こちらの方を強調するために、その前段階として長々と描かれた個人経営の学校の方がはるかに現実感がある。

ディッケンズは、こういう矛盾を乗り越えるために、以下の小説においては、子ども時代に悲惨な生活を送った子どもが、やがてそれを乗り越えて出世していく成功物語をたくさん書いた。孤立無援だった主人公がどのような子ども時代を送るか。『オリヴァー・トウィスト』は、ロンドンの貧民窟をいろいろな面から描き出してみせる。また『ニコラス・ニクルビー』はヨークシャーの醜聞を、『ドンビー父子』では富裕な商家の経済的破綻

の妻じさを。そしてそれらは子どもの全感情をいかに歪曲させるものであるかを。

とはいえ、私たちには別の面もまた浮かびあがってくるように思われる。それは、これらの描写や表現が迫力が出てくればくるほど、ディッケンズの信じている「子ども」が、相当したたかな生き方をしているとは見えなくなる。本当はディッケンズの小説に出てくる子どもたちは、ディッケンズのセンチメンタルな心情を隠すようにはたらいっているのではないかという疑問が湧くのをお否定できない。

おかしいようだが本当だ。

そう思って読み直してみると、ディッケンズの自己憐憫が作品のあちこちで主人公たちに撮影されているのがわかってくる。どうして彼の描く、理想的な子どもははじめから身体が弱く、病弱だったり、しいたげられっ放しだったりするのだろう。おなじ子どもでも、空想にふけったり、喜劇の主人公になったりする面があってもよいのではなからうか。

つまり、ディッケンズはあくまでまじめなのである。

白と黒をきちんと分けないと落ちつかなかったのかもしれないのだ。白と黒の間あたり、あるいは白と黒の境界あたりを、境界の隈^{くま}どりをもっともっていてもよいのではなからうか、と思えてくる。

詩人たちの描いた子ども像とくらべると、小説家たちの描いた子ども像は確実に違っている。ジャンルの違いが、同時代の作品という共通面よりも強く出た。

小説という方法は、詩とくらべると、それだけ大きな対象に迫れる。

ディッケンズの小説はそのことも教えてくれたわけである。

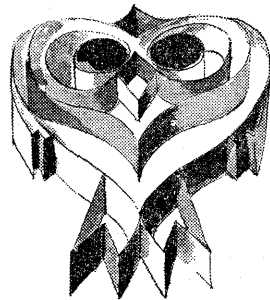
(名古屋大学)

子どもが泣きべそをかくとき

榎沢良彦

子どもを持つ親なら誰でも、我が子に強く育ててほしいと願うことだろう。その願いが強いあまり、些細なことでも（大人にはそう見える）子どもが泣き出すと、「しっかりしなさい」「そのくらいのことですぐ泣くものではないですか」等々と、子どもを励ますお母さんも多いことだろう。そのようには言わないまでも、子どもが泣くこ

とに対して、「意気地がない」とか「弱虫だ」等の否定的なイメージを持っている人は多いのではないだろうか。私たちはつい「強いこと」に肯定的評価を与えてしまうために、「泣く」という行為が子どもの発達過程の中に占めている位置を見落としてしまうのではないだろうか。私自身も「泣くこと」には否定的イメージを持って



いた。ところがある日、この「泣く」ということを私に再認識させてくれる出来事が起きた。ここにその出来事をとり上げて、「泣きべそをかく^(一)」ということについて考えてみたいと思う。

——ある出来事——

ある養護学校で、始業式のあった翌日、新年度最初の授業日に、次のような出来事が起きた。

遅くん^(二)が加藤先生（男性）に抱かれてトランポリンのある部屋にやって来る。加藤先生は遅くん一人をトランポリンにのせ、トランポリンをするようにと勧めらる。遅くんは先生から離されたとたんに泣きべそをかき出す。遅くんは泣きべそをかきながらも、つかまり棒につかまって一人でトランポリンをとび始める。その様子を見て、加藤先生が遅くんの向かい側にのり、一緒にトランポリンをとんでやる。すると遅くんはとたんに笑顔になる。（一九八五年四月十二日の記録より）

この記録を読んだだけでは、何故遅くんが泣きべそをかいたのかよくわからないだろう。それには正当な理由があったのである。

実は、新年度になってクラス替えがあり、遅くんは二年間使い慣れた教室から新しい教室に移ることになった。始業式の日、彼は教室が変わったことを告げられ、ひどく動揺し、新しい教室に入ることを頑として拒んだのだった。そしてその翌日の朝、この出来事が起きたのである。彼はいつものように、旧い教室に入るつもりで元気に登校して来た。ところが、または新しい教室に行こうと誘われ、彼は動揺してしまった。遅くんは加藤先生に抱っこしてもらい、何とかその動揺を抑えて一旦新しい教室に荷物を置きに行った。その直後、遅くんは先生に抱かれてトランポリンのある部屋にやって来たのである。

この日の朝、遅くんはいつもの教室に行くつもりで来た。ところが、新しい教室に行こうと誘われて一種の衝撃を受け、動揺してしまった。遅くんはその衝撃を、加

藤先生に抱いてもらっていることで克服していたのである。しかし、完全にその衝撃から立ち直っていたわけではなかった。そのため、トランポリンの上に一人で立たされた時、遅くんの心にさきほどの動揺が蘇ってきてしまい、彼は泣きべそをかき出したのである。恐らく一人にさせられたことで、彼は心細くなったのだろう。それを察して加藤先生と一緒にトランポリンののつてくれたことで、遅くんは再び強くなったのである。

これが、この出来事において遅くんが泣きべそをかいた理由と経緯である。これだけわかれば、もうこの出来事は十分理解されたと言えるだろう。しかし私は更にもう一步踏みこんで、遅くんの心理を洞察してみたい。そこで私が注目したい点は、「遅くんが泣きべそをかきながら一人でトランポリンをしたこと」である。私にはそれがとても重要な意味を持っているように思われる。洞察を始める前に、遅くんの今日までの成長過程を簡単に振り返っておこう。それが、遅くんのこの行為をより深く理解するための手助けとなるだろう。

——昔の遅くんと今の遅くん——

今から四、五年位前までの遅くんは、馴染みのない大人が近づいて来ると非常に動揺し、激しくその接近を拒んでいた。動揺のあまり、自傷行為をすることもあった。彼が心を許せる相手は親しい保育者だけだった。自分の要求が保育者に聞き入れてもらえないと、遅くんの心は容易に傷ついた。また、自分の遊んでいる所に他児が割りこんで来ると、遅くんは一目散に保育者の許に逃げこみ、保育者の胸に顔をうずめるようにして抱かれるのだった。

やがて遅くんは自分の方から積極的に他者に関わっていくようになった。今では他児に玩具や遊具を取られても、逃げ出すどころかそれを奪い返そうと試みるようにさえなっている。以前には、些細な事で傷つき、悲しそうな表情をしていたのが、今ではそんな表情はめったにしないし、傷ついてもすぐに立ち直ってしまう。

一般的に、子どもが自己の世界を拡大していくことは、外的世界に積極的に立ち向かう態度と、そこから退

却し寛ぎを求める態度とを交互に採ることによって行なわれていく。この二つの態度が子どもの中で調和を保って立ち現われてくる時、子どもは飽くことなく外的世界に挑戦していくと思われる。

ところが、昔の遅くんは外的世界に対して非常に敏感で、極めて逃避的であった。ちょっと気持を傷つけられるようなことが起こると、たちまち保育者の許に逃げこんでしまい、自分一人でそれを乗り越えることなどとてもできない子であった。遅くんは保育者の胸に顔を押し当て、外的世界を自分の背後に退けてしまうのだった。遅くんがしだいに積極的に外界に関わるようになってきたから、何か嫌なことがあると、さっと保育者の許に逃げこんでしまうことはよくあった。しかし今では、一気にも外的世界から保育者の許へ退却するという態度はほとんどなくなり、自信に満ちた積極的な態度が強まってきている。

——「泣きべそ」とトランポリン——

それでは出来事の考察に戻ることにしよう。

四、五年前までは、遅くんは何かつらい事態に直面すると、ひどく動揺し、そこから逃げ出し、保育者に保護を求める子であった。保育者の許に逃避し、その胸に抱かれている間、遅くんが自分で何かをするという態勢にはなかったことは言うまでもない。遅くんは自分自身の現実的活動を一切放棄し、保育者の許で心の動揺が和ぎ、活動への意欲が湧き上がってくるのをひたすら待つばかりであった。それでは、この出来事における遅くんの態度はどうであろうか。

遅くんが経験したつらい事態は、この日の朝新しい教室に行こうと誘われたことだった。遅くんは動揺した。しかしその動揺を、遅くんは加藤先生に抱かれることで克服し、新しい教室に入るといつつらい事態に加藤先生と共に挑んだ。ここには、保育者に抱かれるという逃避的な態度だけではなく、手助けがあるならばつらい事態に対しても立ち向かおうとする態度をも、遅くんは持っているということが窺われる。その挑戦の後、遅くんは

加藤先生とトランポリンのある部屋に来たのだった。

トランポリンの上に一人置かれ、泣きべそをかいた時、遅くんの心の中にはついさきほどのつらい事態が浮かび上がってきていたのである。遅くんはその蘇った動揺に再び耐えなければならなくなった。しかしこの時、

遅くんは加藤先生に助けを求めることはしなかった。彼は泣きべそをかきながらも、一人でトランポリンをとび始めたのである。彼は蘇った動揺に自分一人で耐えようとしていたのである。この時、遅くんは、現実のつらい事態に直面しても少しも動じることなく、一人でそれに立ち向かって行ける程心が強いわけではなかった。そうかと言って、その事態に背を向けてしまい、それを見まといと自分の世界に閉じこもってしまうとか、あるいは保育者にしがみつくことで自分の活動を放棄してしまうというような、極端な逃避性ないし消極性の中にいたのではなかった。遅くんはこの時、本当に誰かに助けを求めたいくらいだったのだろう。でも彼はそうはせず、心の中に蘇ったつらい思いから顔をそむけず、一人でそれに

耐えようとした。つらいけれども、一人でそれに耐えようとするその心理が、泣きべそとなって現われたのである。実際に、泣きべそをかきながらもトランポリンをとり始めた遅くんの姿に、自分の力で何かをしようとする前向きな姿勢、活動への意欲が見て取れるだろう。

トランポリンは遅くんの大好きな遊具である。遅くんには、一方で、つらい気持を癒すために加藤先生の許に行きたいという気持があり、他方、大好きなトランポリンで遊びたいという気持があったのだろう。この二つの拮抗する、あるいは矛盾する気持の間に遅くんは立っていたのである。そして彼はトランポリンで遊ぶことを選んだ。それは彼にとっては、大変なエネルギーを必要とする精神的苦闘だったにちがいない。だから彼は泣きべそをかいたのである。

遅くんがトランポリンをとび始めたということが、彼がつかない事態に屈せずそれに立ち向かっているということを、如実に示している。しかしそれ以前に、遅くんが二つの拮抗する気持を同時に抱いたこと自体が、そして

この二つの気持の間で心が揺れたこと（泣きべそをかけたこと）自体が、遅くんがまがりなりにも自己の直面したつらい事態に目を向けることができる位に、彼の自我が強くなっていることを示しているのである。さもなければ、一人にさせられた時、遅くんは何のちゅうちよもせず加藤先生を追って行くか、それとも悲しい表情をして加藤先生を呼ぶかしたことだろう。ところが彼はそうしなかった。自我が弱すぎる時には、対立し合う二つの選択肢の間で迷うことはないのである。なぜなら、その時には、彼の取るべき道は始めから一つしかないのだから。

——発達における「泣きべそ」の意味——

このように、遅くんは泣きべそをかきながら悲しい気持と闘っていたのである。実を言えば、遅くんが泣きべそをかくということは四、五年位前まではなかったこと(三)なのである。それ以前には、自分の意がお母さんに通じなかつたり、心が傷つくような事態に出会うと、遅くん

は激しく泣いてお母さんに悲しみを訴えていたのである。彼が外界に積極的に出向いて行くようになると共に、彼は泣きわめくこともしなくなり、べそをかくようになってきたのである。

泣くことができるということは——それが泣きわめくことであろうと泣きべそをかくことであろうと——ある意味では、自己が外界からの衝撃を、自我を危機にさらす程強烈なものとは受けとられないということでもある。というのは、衝撃をあまりに強烈に感じてしまうと、人は泣く余裕すら失うと考えられるからである。(四)またある場合には、泣くことができるということは、自己が外界——に特に他者——に対して心を開いているという(五)ことでもある。言い換えればそれは、自己が外界と関わりとうとする態度を持っているということでもある。また、泣いている最中には、自己はつらい思いを外に向けて発散し、その思いを和げることができると。(六)

つまり、泣くという行為は——それがどのような泣き方であろうと——自己が外界からの衝撃を何とか受けと

めることができるということを前提にしているのである。その時自己は、外界との関係を決して断絶してしまふことはせず、どんなに僅かではあつても、外界と関わり続けようとする態度を保持しているのである。そして泣くことにおいて、非常に消極的ではあるが、自己は傷ついた自己を自ら支えようとしているのである。こうして泣くという行為は、外界と関わり続ける中で、自己の存在を保持しようとする自己の主體的活動であると言ふことができるだろう。

このような自己の態度が泣くという行為の基盤には根本的にあるのであり、その上で、自己が外界の衝撃をどのように受けとめ、それに対処するのかに応じて、泣きの形態が異なってくるのである。発達のに、泣きの形態は、まずは「声を上げて泣く」ことから始まり、「表情だけで泣く」泣き方、そして泣く行為が内在化された「心で泣く」泣き方というように分化し、多様化していくと考えられる。^(七)

話が少し一般的になり過ぎてしまった。ここでは、泣

くことの一一般論を展開することが目的ではなく、遅くという一人の男児がある状況の下で泣きべそをかいた、その時の心理状態を洞察することによって、「泣きべそ」の持つ発達のなある意味を捉えようとするのが目的である。そこで遅くに戻って、「泣きべそ」の意味をまとめよう。

遅くんがかつて激しく泣いたり、あるいは一気に保育者の許に逃げこんでいたのは、彼が外界からの衝撃をあまりに強く感じてしまい、それだけ多く保育者の手助けを必要としていたからである。そう考えると、遅くんが泣きべそをかいたことは、非常に意味深いことであると言える。何故なら、その時彼は悲しい思いをしながらも、保育者に手助けを求めないでいられたのだから。遅くんが泣きべそをかいたことは、つらい事態に直面しても、彼が自分一人でもそれに耐えられるようになってきたことの一つの現われだったのである。

以上の洞察から、次のように言うことができるだろう。「泣きべそをかく」ということは、自己が何らかの

現実のつらさに直面した時、そこから完全に逃げてしまふことはせず何とかその現実を目を向け続け、それと取り組もうとする前向きな姿勢を自己が取っていることの現われでもある。それは、自己が現実に対して背を向けながらも顔だけは現実に向けているとも言ふような、微妙な心理状態にすることを意味している。より抽象的に言うならば、それは、正か負かという二分法的な捉え方では済まされない、積極性と消極性ないし能動性と受動性の融合地帯に、自己が立っていることを意味しているのである。

「泣きべそ一般」をすべてこのように解釈することは控えねばならないだろう。しかし、「泣きべそ」には、状況によっては以上のような意味があるということを得ておくことは、子どもを育てる者にとって必要ではないだろうか。

〔注〕

(一) 顔は泣いているが、泣き声はほとんど出さない、つ

まり表情だけで泣く泣き方を「泣きべそ」と定義しておく。

(二) 遅くんは一九八五年四月現在、養護学校三年の男児である。以前は、彼は消極的で傷つき易い子であったが、今では積極的に逞しい子になっている。その姿から私は彼に「遅くん」と名づけた。なお、この命名法は山中康裕氏（京都大学）の方式に倣ったものである。

(三) これは今の時点でお母さんに伺ったことなので、かつて遅くんが全く泣きべそをかかなかったとは断言できない。しかし、昔遅くんが泣きわめいていたことは事実であり、今では泣きわめくことはないというのも事実である。

(四) ドイツの強制収容所において、囚人たちは、強烈な絶望感と死の不安に襲われ、一時的に無感動無関心の状態に陥ったことはよく知られている事実である。V・E・フランク『夜と霧』みすず書房 一九七一年を参照。

(四) エンカウンター・グループにおいて、強い孤独感を抱いていた人が、グループのメンバーに受容されると感じた時、彼はメンバーの前で素直に泣けるようになる。泣きながら彼は、自己の孤独感を切々と打ちあけるのである。その時彼は、自己の孤独感を直視し、自らそれを乗り越えることを始める。 C・ロジヤーズ 『エンカウンター・グループ』 創元社 一九八二 一五〇—一六五頁 を参照。

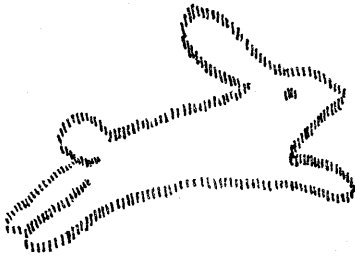
(六) カウンセリングにおいて、回復の過程で、患者が自己の抑圧されていた感情を涙ながらに語ることもある。恐らく、語ることに相俟って、泣くことが人の気持を軽くするのだろう。泣くことによって気持が和らぐのは、自己の弱さを他者が肯定的に受けとめてくれるという信頼感と安心感を自己が抱いているからなのだろう。カウンセリングの事例については、山中康裕『親子関係と子どものつまずき』 岩波書店 一九八五 九〇—九六頁 を参照。

(七) 日常的な観察から言って、乳児期の子どもは声を上

げて泣く。幼児期以降の子どもになると、泣きべそをかくこともよく見かけるようになる。我々大人は、努めて悲しみを表面に出さないようにする。なお泣く理由には、悲しみや不安のほか、感動もあるが、感動による泣きは本論文の範囲外である。また、乳児期から子どもは、自分の生理的欲求を母親に伝えるために泣いたり、他者の関心を引くためにわざと泣いたりする。本論文では、自我の発達という観点で泣くことを考えているので、そのような泣きも、ここでは考察の外に置いておく。

(東京大学大学院)

秋 が く る



蕪木寿江

— その一 —

こどもが急いで行く
靴をつっかけながら
どこへいくんだらう
こおろぎでも 見つけたのかな

こどもが飛んで行く
スキップの足どりで
どこへいくんだらう
赤とんぼの群を 見つけたのかな

こどもが走って行く
人形を抱いたまま
どこへいくんだらう
面白いもの 見つけたのかな

大人が座って絵をかいている

「園長先生、それ誰にあげるの？」

「きよちゃん？」

「おひっこしするの？」

「雪のいっぱい降るところだって……」

「わたしもおひっこししたいなあ……」

夏の名残りの朝顔

色づいた葡萄の葉

その下で遊ぶ友達いっぱい

絵の中の こどももふえる

まわりの こどももふえる

——その二——

「せんせい 運動会 またしようよ

せんせい 運動会 あしたしようよ」



赤白帽子が きらいで

園庭の白のラインが こわくて

友達と並んで走るのが いやで

練習が始まる一週間は

ジャンブルジムの上に 一人でいました

桜が一つ二つ紅葉しだし

桐の花がカサコソと音を立てる中で

レコードの音をさえぎるように

両手で耳をふさいで見えていました

一年たったら 赤白帽子もかぶれます

白のラインも平気です

友達と競争しても走れます

レコードの音にも慣れました

こうやって

一斉に走ることを覚えるのでしょうか

こうやって

自分を主張しなくなるのでしょうか

こうやって

幼児期から少年になっていくのでしょうか

こうやって——こうやって……

先生の背中で 大声で泣いていた日々が

こんなに僕を 変えたのだと

そう納得しようと 思いました

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

子どもたちのこと

七、チビちゃん

大橋利恵子

今年入園した子の中に身長九一・九cm、体重十三・二kgの子がいる。四歳三か月の女の子にしては大変小柄であることはまちがいない。アトピー性皮膚炎に悩まされ、まだ顔やおなかなどにも赤い湿疹がポツポツとみえる。からだが小さいことと、発達程度や精神年齢が幼いことは、因果関係はないのかもしれないけれど、小柄なK子は全体的に幼なく、思わず「チビちゃん」と言ってしまう。また、登園するとすぐに、私の足めがけて突進し

朝、登園するとすぐに、私の足めがけて突進し

てくる。(私は背が高く足も長い?)ので、どうしても足にしがみつくことになる。)抱きついて上から「おはよう」と言うと、「いやんもん」「制服脱いできたら?」と促すとまた「いやんもん」しかたなく、よいしょと持ち上げてロッカーの前につれていく。それがうれしくてまたしがみつく。軽いのでつい私の方も持ち上げやすく、他の子だってやってほしいのだからなと気づかないながらも、K子を抱くことが多くなってしまふ。あまり多くてもいけないなと思ひ、三回目には「さ

あ、がんばって」とK子をそこに置き、他の場に行くことにしている。

K子の「いやんもん」はまるで「はい」というあいさつがわりで、何を言っても「いやんもん」「できない」（共に岐阜の言葉でいや、できないということ）とかえってくる。よく何でも親にやってもらっている男の子も「できない」を連発するが、そうした場合、こちらもそれにこにことはしていられず「これからは何でも自分でやろうね」などといった説教をしてしまう。でも、K子の場合にはやればまあまああつうにできるのに、ちゃんと甘えて「できない」と言うので、ついついこちらも「困ったわね」と手を出したり、「がんばらなくちゃ」とはげましたりという対応になる。よく考えてみればチビちゃんの作戦勝ちであり、明るい性格と小柄なことをフルに活用して甘えんぼをしているK子である。

K子は現在、施設から通園している。その施設

は親のいない、もしくは親が何らかの事情で子どもを育てられない場合の赤ちゃんから中学生までをあずかっている。K子は赤ちゃんの時から施設で育ち、親の味を知らない。くったくなく誰にでも甘えていける性格は、その施設の生活で培われたし、また、施設の生活には大変有効な性格かもしれない。

最初にK子が全体に幼ないと書いたが、言葉の発達もまた充分でなく、サ行もカ行もタ行になっってしまう。だから「てんてい」だし口ぐせの「ばか」も「ばた」である。先日、園外保育に行った時に、大変おもしろいことがあった。その日、K子はA男と手をつなぎ先頭を歩いていった。よつ角を渡る時に当園では車の有無を確認する為「右よし、左よし、右よし、さっさと渡りましょう」と大きな声で言っている。K子はいつものように「右よし、左よし、右よし、たつたと渡りまっちゃう」と元気に言っている。となりのA男も負けず

に「右よち、左よち、右よち、ちやっちやと渡りまちょう」と言う。それを聞いていた子は「たつた、だもん」とA男に、するとA男は「ちやうよ、ちやっちやとだよ」K子「たつた！」A男「ちやっちや！」とやりあっている。自分の発音はなおせなくても耳はきちんと判断できているので、他の子のまぢがいには気づけるようである。二人ががんばって言いあっている間に私が割りこみ「そう、さっさだね」と言うと二人して「うん！」笑いをこらえるのに必死であった。

そんなK子が五月もおしまいになるころにいつものようにだっこされにきたので「またチビちゃんですか？」と聞くと「チビじゃないもん」とはつきり拒絶した。ああ、K子のプライドが芽を出してきたなど大変うれしく思い、その日以来、チビちゃんではなくなったK子さんである。

(岐阜北幼稚園)



私が見たインドネシアの

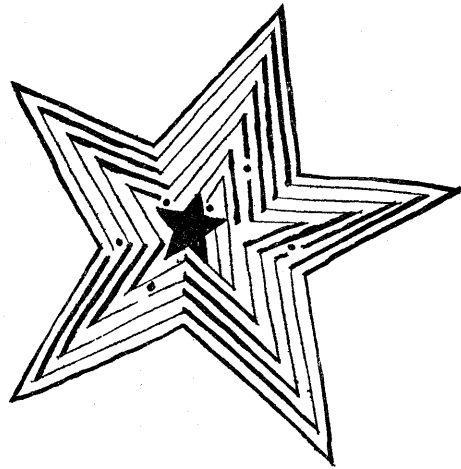
幼稚園と子どもたち

(前編)

近藤伊津子

これはインドネシアのカトリック教会の附属幼稚園にほんのしばらくの間、入園させてもらった時のことである。

昨夏のこと、インドネシアの首都ジャカルタから東方にある大学都市バンドンで過ごした折に、知人の中国人



系のインドネシア人の紹介で実現できた。バンドン市の街の中心近く、やや東側の大通りジエンデラル・アハマツト・ヤニ通り(アハマツト・ヤニ將軍通り) No.265 に在る幼稚園である。

聖・十字架・セント・アウグスチヌス附属幼稚園。幼

稚園の他に小学校と中学校も附属していた。

朝七時十分から九時三十分までが五歳児クラス、二十
五名。九時三十分から十二時までが四歳児クラス二十
名、計四十五名の小じんまりとした園である。カトリッ
ク教徒の子どもだけでなく、いろんな宗教の子ども、そ
して親の階層、学歴も様々であるときいた。親は博士、
学卒、運転手、学校の教師、中国人系などなど。月謝は
最高が一二、〇〇〇ルピア、一〇、〇〇〇ルピア、八、〇
〇〇ルピア、六、〇〇〇ルピア、一、二五〇ルピアとこ
れまた様々であるときいた。この附属の教師の子は一、
五〇〇ルピアであるという。このように月謝納入の一覧
表を見せて説明を受け、これは「入園の時、親と話し合
って決める」ということで納得がいった。まさしくイス
ラム社会の古き習慣である。(四ルピア一円)

この四十五名の園児に園長(四十歳位、女性)、助手
先生(三十歳位、女性)、さらに補助員(二十五歳位、
女性)の三名が常時教室にいる。指導は園長と助手。教

材配布、ゴミ拾いなどの介助を補助員がする。園長先生
は体格立派な美女で当市の幼稚園協会々長の要職にも就
いているとのことであった。

園児たちは赤いチョッキとスカート、または半ズボン
に白い半袖シャツ、白ソックスと清潔な身なりである。
これはSD(公立小学校)の制服とそっくりである。

建物は通りに面しており、低い木製の白い垣根をおし
て入ると広い前庭に入り、その奥が教室となる。教室は
六〇平方メートルもあるうか、四五人がけの丸または角
のテーブルと椅子が、ほどよく納まっている。最後部に
は園長の立派なデスク。奥の壁には飾り棚があり、この
園特有のミニチュアの台所用品が、飾られていた。その
欄の下には遊具がいていねいにしまひ込まれていた。ブリ
キ製のおままごとなど。入口に近いところのガラス窓の
下の戸欄には、一部本棚になっており三色刷りの薄い絵
本が六、七冊置かれていた。指人形など遊具が納ってい
た。教室の奥の扉を開けると中庭があり、小学生の校庭
のようであった。その扉の右手に手洗用の水道蛇口が一

つあり、その奥にトイレが一つ。運動場に面した一室は物置きを兼ねた台所で、月一回、園児の母達が来て、昼食を作り、園児たちと一緒に食事をするという。いずれも小ざっぱりとしていた。トイレは水洗であるがこの国特有の使用法で、右手の手おけで水を汲み、左手で洗いながら流すので、どこのトイレも足元が水びたしになっているが、これも例外でなかった。

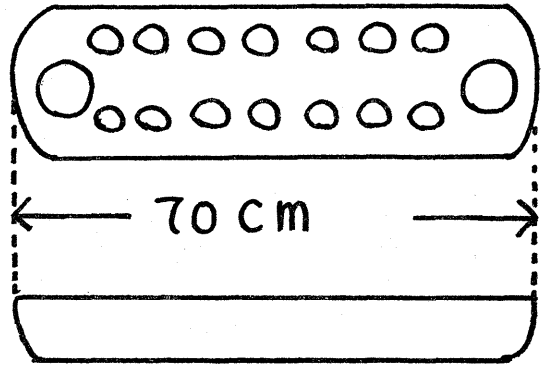
インドネシアの朝は早い。従って園の始まりも早いのである。子どもたちは三三五五と、自家用車で、徒歩で、親やメイドにつれられて来る。前庭に整列、園長先生と助手先生が園児の頭髪、耳の後、歯、手、爪、靴下などの点検をして室内に入る。席に着いて朝の挨拶、私にも「バギー、ブー」という。私は「バギー、アナナ」と返す。パンチャシラ（建国五原則——憲法）の歌をテープで聴かせ、それからキリスト教のお祈りを唱える。教室の真正面には、パンチャシラのシンボルの絵と国首の肖像の写真があり、後の壁に十字架があった。

それから三〇分、自由に好きな遊びをする。

おままごと、ごさを敷いて、みんなお母さん役、私ひとりお客さまになった。葉っぱを刻む、お釜に入れ下からうちわでおおぐ。蒸器に入れる、ふたを取ってうちわであおいだりする。ごちそうが出来上る前にこの遊びの時間はいつも終わってしまう。ブリキ製で、この国の台所用品がほとんどそろっているのである。

バケツに水を入れ、前庭に持って行き、たくさんの小さなコップ（プラスチック製）で水を汲み、それを長く並べる子。人形の赤ん坊をベッドに一生懸命に寝かせる子、人の形、動物の形のジグソーパズルに熱中の子。じゅんけんをしている子。母指は象、人指しゆびは人、小指はアリを表わす、この三つのいずれかを出すのである。人は蟻に勝ち、蟻は象に勝つ、象は人に勝つのである。残念ながら掛声を忘れてしまった。

「ダゴン」というゲームは六〇センチメートルほどの長さのカヌー形の木製で、中に大小十六のくぼみがあり、そこに宝貝をある、ルールに従って入れては一部出した



や園のはラワン材の質素なものであったが、高級家具店や骨董、店では黒檀、チーク材で彫刻の施されたものがあった。粒の揃った宝貝も美しく、掌からすべり出るように、ほみに入れられていくのを見るとその仕草は魔術のように見える。

前庭ではシーソー、追っかけっこ、さまざまである。

り、また入れた

りする。ルール

が難しく園児た

ちはルールおか

まいなしに遊ん

でいた。私も園

長先生に習った

が、なかなかむ

ずかしく、帰国

してから憶え

た。このゲーム

板は、一般家庭

ままごと以外は男女の差はない。

やがて先生の笛の合図で遊具を片付け席に着く。

折紙、あひるを黒板に貼り、女兒にブルーの色紙を配

り、丁寧な説明。懸命に折る。出来上ったあひるをノー

トに貼る。私にも、といわれ、持参の千代紙を配りだま

し、ぶねを一緒に折り、大きな千代紙で、つるを何羽も折

って飛ばして遊んだ。

やがて、そこで手を洗い（厳重に先生が注意する）持

参の弁当を開く。その前にお祈り。

小さな水筒にはどの子も甘味のジュース、プラスチック

クの弁当箱には菓子パン一ヶがほとんどである。中には

焼き飯、白い飯の上に肉などを載せたもの、クレープ

（母親の手製という）。紙ナプキンを一枚ずつ配られ口元

を拭かせた。私には菓子パンと甘い紅茶を出してくれ

た。賑やかである。席を立ち歩く子もあるが……。終っ

てカバンにしまい、帰り仕度。園長先生と私に握手して

「スラマット、ティンガルー」と言い前庭に出て行く。私は「スラマット、ジャラン」と返す。迎えに来ている

父母らに渡し、次の五歳児が教室に入る。

五歳児もカリキュラムは同じであるが、手遊びとか工作はかなりうまく、たとえば色紙を鉄筆の先で押えちぎり糊で貼りつけ絵に仕上げていく。精巧な出来上りである。その他、何色から色糊を画上紙の上で指、掌でぬりつけ、好きな絵を描く。また、絵の具をたっぷりの水で溶き、筆にふくませ、何となく何かが描かれていく。思いがけない出来上りに歓声を挙げる。この子どもたちの発想にまかせた指導にはいささかびっくりした。滞在中私の娘と一緒に、と連れていってもらっている画塾では、まさに模写に徹しており、娘はうんざりしていた。この国では、未だ子どものイメージを重視した絵の指導はあまり盛んではない、とも聞いていたからである。

早朝から（宿舎を出るのが六時三十分、朝食は六時少し前）一時ごろまでの園生活で少し体調をくずし胃痛が絶えまなく続いていたが、この絵の時間は楽しくそれさえ忘れていたということも憶えている。

さて、ある日、園長先生は会議があるということ、

四、五歳合同保育（七：〇〇AM～九：三〇）となった。

その日は定期的な週一度の散歩をするようになった。園児は揃いの白い半袖と緑のすじの入ったパンツ、白い帽子で登園して来た。前庭に整列して出発。助手先生がターンバリンを打ち歩調を合わせようとする。周辺の住宅街を十五～二十分歩いて、奥行きのある大きな門扉の前に来た。じゃらんじゃらんと大きなドラが鳴り門が開いた。同教会の養老院慰問である。門の中に入ると草花が美しく、歩道の左右に連棟の、または別個の家屋が連り、道に向けて窓もドアも開け放ってあり、老人は椅子に、ベッドに座っている。園児たちは一人一人の老人に、声を張りあげて「シアン・ブルー」と何度もくり返す。こだまするように聴えた。一番奥に病室があった。かなり広く三十ベッドほど、ゆったりと置かれ、重症の老人が横たわっていた。婦長の案内で、病気の説明もしていただきたいが、癌の末期患者もいるという。写真を撮ってもよいといわれたが、病室の老人たちにはカメラをむけられなかった。

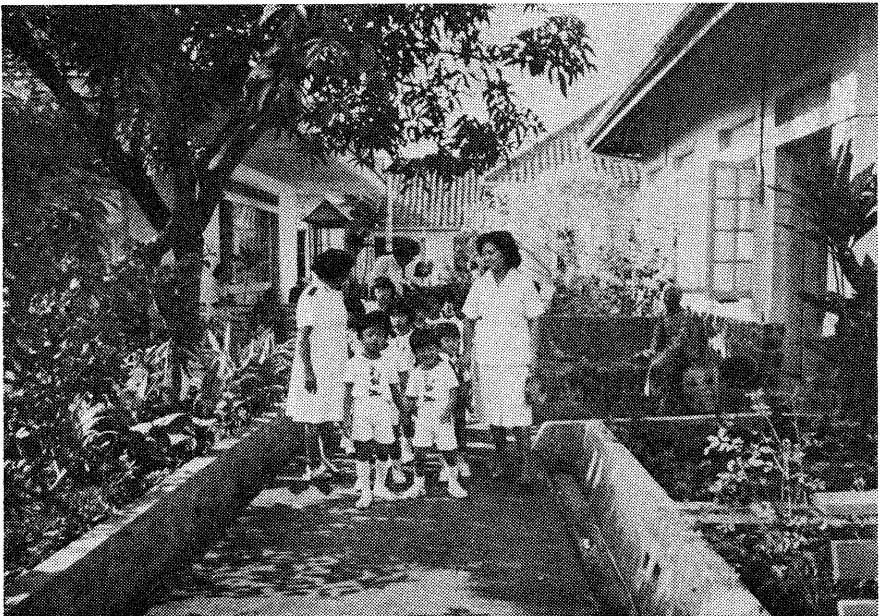
また、愛らしい声で別れの挨拶をして、じゃらんじゃらんと門を鳴らして帰路に。

清潔で明るく、花の色彩が、老人に似つかわしくないほどであった。こども、有料、無料さまざまの負担であるという。富める者は出し、貧しい者は富める者から恵みを受けるのは当然のこと、という哲学であろうか。

帰園し食後、帰宅。

この日は、私を迎えに来た車で園長先生も会議のある場所まで同乗の車の中で、園長と家庭の話し。中学・小学生の息子がいる、夫婦とも働いているが、メイドは子どもの教育上、良くないというより悪い、親の言うことを聞かなくなる、わがままになる、そういう理由でメイドを雇っていないということだ。朝三時起床、一日のすべてを準備して六時に園に着いている。帰宅すると夕食は二人の息子が全部整えてくれているとうれしそうに話してくれた。

中流以上の家庭では一〜二人のメイドを使っているのが普通の国であるが、教育上好ましくないという理由を



はつきりときかされたのは初めてであった。なるほど、と思われる。人件費が安い（失業率が高い）ので、上流家庭ではメイドの外にボーイ、運転手、庭園があれば園丁とたくさんの使用人がおり、門扉が音も無く開いたり、お茶が音もなく人の気配すらなく出て来たり、下げられたりする。メイドは裸足が歩くから大理石の床では音がしないのである。こんな環境の子どもは、目の色一つで使用人達が動いて、すべての要求を満たしてくれるわけで、自ら労役することは何もなく育つ五〜六歳になって、食事中、自分では食器にも触れずに、つまりメイドに口の中に食物を入れてもらい、その間、手はぶらんとさげたまま、というのを見たことが何度かあった。

この園でも、母たちの作った焼きめしを一緒にごちそうになった時のこと、自分で食べべ（られ）ない園児を二〜三人見た。園長、助手先生が、横に座って口に入れてやらねばならなかった。腕はおろしたままであった。ついでであるが、この国での食事の作法は皿の上にごはんをよそい、副食のものを上にかけ、右手の母指、人さし

指、中指で、混ぜあわせ、口に運ぶ。指先で味わいながらの食事でもある。家庭ではほとんどこうして食事をするのであるから、スプーンはまことに苦手のようであった。この日は、食事前に食事の作法、スプーンの使い方の説明があった。口に直角に入れてはいけない、横にしない、口の音をたててはいけないなどと。指で食べることからスプーンを推めているのは、手洗いの徹底と合わせて、衛生思想向上のためと見た。清潔であれば指で食べるの方がはるかにおいしいだろうと見ていても感じた。そしてこの国の文化であるのだから。

（つづく）

（かっこう文庫主宰）

新任のつぶやき

空井葉子

私が幼稚園に勤めたいと思った動機は、子ども（幼児）達と一緒に生活したら何かおもしろいことがあるにちがいないという期待である。おもしろさとは、大人とは異なる子どもの意識や感覚にふられることと身体中をフル回転させて具体的な事象と関われるということである。幼稚園での生活が始まって二ヵ月。私の期待は裏切られなかった。子ども達やすてきな先輩の先生方に囲まれた生活はたいへんな事も多いが、たいへん楽しいものである。

私が受け持っているのは四歳児（年中児）二十五名で、ベテランの先生が週に二日、一緒に保育に携わりな

がら細かい指導をして下さっている。入園式から二ヵ月経って、子ども達も私自身も四月の緊張がとけ、地が出て始めているところである。子ども達の魅力のひとつは、その正直さであると思う。保育者側が示す遊びや活動、お話等がおもしろいかどうかに実に敏感に反応する。つまらなければ全くそっぽを向いてしまう。規則についてもこちらが中途半端な気持ちでいると決して身につけてはくれない。そのかわり真剣な関わりや子どもの興味に即した関わりにはキラキラした瞳で応えてくれる。本当に困っている時には手助けしてくれる。こういった子ども達の正直さ、率直さに接していると、子どもは知識や

潜入観にとらわれずに、様々な事象の本質を的確につかみ取る素晴らしい能力を持っているように思えるのである。

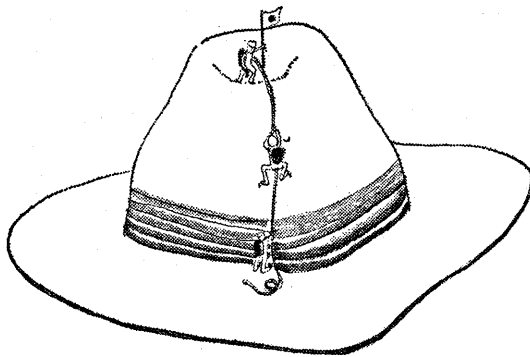
子ども達のもう一つの魅力は、子ども自身が自分の全存在を賭けて、懸命に生きているということである。ひとりひとりが各家庭や今までの経験を背負って幼稚園に集まってくる。新しい友達や遊びとの出会いの中で、身の処し方を体得していく過程、よりおもしろい遊びを工夫し、産み出していく過程、欲求が満たされなかった時のショックを乗り越えていく過程等、それぞれの子どもによって行動は様々だが、そのいずれも実にたくましく、子ども達の懸命に生きていくエネルギーを見せつけられ、圧倒されてしまう毎日である。ここで子ども達の工夫する力、発想の豊かさに驚かされた「色水遊び」に少し触れてみたい。

色水遊びは四月中旬に、年長児が持っているのを見て自分もほしくなった子ども達から始まった。年長児はチョークを短かく切ったものをビニール袋に入れ、色水を

作っている。黒板がめちゃくちゃになることを恐れて、私のクラスにはほんの少ししかチョークは出してない。そこである子どもは使いかけのクレヨンを集めたカンの中から適当な長さのものを見つけて水につけてみる。もちろん色は出ない。そのうちどこで知識を得てきたのか、水性ペンで色を塗った紙を水に入れ始める。これは大成功。きれいな色水の出来上がり。手近に油性マジックがあれば、そこで紙に色をつけて水に入れる子もいる。これは失敗。不思議に思いながら色水作りを繰り返すうちに、同じ色のペンでもペンの種類によって色水ができるものとできないものとあることがわかってくる。わかった子どもはまだよくわからない子どもに得意気に教えたりする。単色だけでなく何色かを紙に塗って、どんな色の水になるかを試す子どもも出てくる。さらには油粘土を入れたり、セッケンを入れたりきれいな包装紙を入れたり、草花や泥を入れたり……。最近ではビニール袋の裏側に直接水性ペンで色を塗り、色水を作る子どもも現われた。何も入っていないのにきれいな色水が

できているので、驚く保育者に得意そうに説明してくれ
る。子どもの発想の豊かさには正に目を見張るばかりで
ある。しかし保育者としてはおもしろがってばかりもい
られない。色水遊びが始まると水の袋が乱暴に振り回さ
れて破裂したり、穴が開いたりで床が水びたし。ぬれた
粘土を扱った手でガラス窓をさわれば見事な手形のでき
上がり。そのたびにあちらこちらと飛び回らざるを得な
くなる。

子どもの自由な発想を最大限に実現させたいと思うの
だが、限りある教材と保育時間そして園生活の秩序を保
つためには、ある程度子どもの行動を制限せざるを得な
くなる。これが新米保育者には難問のひとつである。前
にも述べたように、子どもは保育者の態度の曖昧さに実
に敏感である。はつきりと困ることは困ると言わなけれ
ばやりたい放題である。子どもの発想をおもしろがって
いるだけではいられない。ついつい笑顔で「困るわ」と
言ってしまったら、あわてるのをおもしろがられて大洪
水になってしまう等の失敗は数限りない。物わがりのい



いお姉さんではいられないということを変更して実感させられる。

私の勤めている幼稚園では自由保育の形態をとっている。個々の発達を保障していく上で自由保育という方法はとても有効だと思う。しかしそれは保育者が各子どもの発達段階や成長の見通し、集団性を考慮した許容範囲を把握し、それを実現していく保育技術を身につけていることで、初めて有効なものとなる。私の場合は放任と紙一重で全くの綱渡りの状態である。さぞ先輩の先生方はハラハラしているだろうと思うのである。ハラハラさせながらもなんとか一人前の保育者になればいいが、そのためにはずい分と多くの課題を乗り越えなくてはならないようだ。

「あなたと遊んでも子どもはあまりおもしろくないと思う」

これは教育実習中に私が受けた批評のひとつである。今でも私の心に深く刻み込まれ、とても考えさせられる言葉である。子どもにとっておもしろい遊びとは何か。

たぶんそれは子どもの欲求や好奇心を満たし、かつ気持ちよく遊べる活動であろう。つまり子どもをよりよい方向に成長させるような性質を持つ遊びであるだろう。こういういった遊びを保育場面の中で実践していくためには子どもと同じ視点に立ちながら先を見通していく力や振舞い、大人としての「良い成長の方向」を明確にしておく必要があると思う。保育者自身の好奇心や発想の豊かさ、常識・知識等が問われるところである。保育という活動は子どもとの瞬間々々のぶつかり合いの積み重ねであると思う。保育場面で考え込んでいる暇はない。だからこそ実践の中での反射神経が問われるのだと思う。日常の自分自身の意識・考え、行動全体が問われるのだろうと思う。幼稚園での生活に慣れ、地が出てくるに従ってその思いは強くなる。まずは「片付ける」ことの苦手をささどう克服するか。これが当面の私の重要な課題のひとつである。

(横浜学園附属元町幼稚園)

教育実習ノート

◆YさんからK先生へ

○月○日

みどり組

バスから降りるとけいちゃんが、両手をひろげて走ってきて、部屋の入口で待っていたK先生に飛びついて抱きあげてもらうと、今度は隣りのたかちゃんの肩をさわる。なんのことかわからなかったが、K先生はたかちゃんを抱いて、「おはよう」をしていた。もし私だったらわかってあげられたらどうかと思う。

◆K先生からYさんへ

けいちゃんは、自分がしてもらって嬉しいことは友達にしてあげてほしい、と言っているのです。けいちゃんは、殆んどしゃべりませんが、心

が通いますし、友達が大好きなので、日常生活には困ることがありません。たかちゃんは、ことばの発達がおくれていたのですが、早くに気づき、お母さんといると安心だ、という状態からことばもでて、指導を受けていた治療教室でも「もう大丈夫ですよ」と言われ、近所の幼稚園に行きたとたんに、強制されることが多く、四日行っただけで登園せず、又話さなくなりましたお子さんです。キンダーガーデンである筈の幼稚園が、子どもの「ことば」も奪ってしまう、ということはどういうことなのでしょう。ここには十月に遊びにきてから、遠いのですが休まずにきています。僅かの日数なので、同じような状態の、ともおちゃん、しげちゃんを中心に勉強なさると

いいでしょう。

◆ YさんからK先生へ

○月○日

二日目になったら、きのうは遠くから私を眺めていた子どもも話をしてくる。私は、ともおちゃんやしげちゃんと遊ぶ時、何か心配するような気持でいるのに気がつく。これはいけないことだと思ふ。「心を育てる」と言っても、全員に言えることで、はらはらしながら遊ぶということは、侮辱していることではないだろうか。そのところがまだよくわからない。K先生は、いろいろな事について、その都度、ほめていらっしゃるが、それは子どもにとっても、とても誇らしげなことでしょう。「ありがとう」がとても自然に言える。

◆ K先生からYさんへ

「侮辱」ではなく、おそれ、おののきではないでしょうか、保育者としての素質の中に、私はこの「おののき」をとりあげます。傲慢な人は保育はできません。

。片眼をつむつても、にっこり笑つても、じっと見つめても、又は先生をたたいても「おはよう」にはかわりはないのです。声を出さないから「おはよう」ではない、というわけではないのです。形式ではなく心なのです。そう思っていますのに、何故か挨拶の上手な子ども達です。生き生きとした表情なので、「形」だけではないと思うのですが――。

若いお母さんたちへ

—子どもの成長・母の成長—

はるにれの会

川上 美子

倉橋惣三先生は、赤ちゃんの誕生と同時に母の誕生もあり、成長するのは子どもばかりではなく、母（らしさ）の成長もある、と言っておられる。もうすぐ第二子が誕生する。これを機会に、長男のT誕生から二歳五ヵ月の現在に至るまで、私が折々つけてきた記録を読み返してみた。すると、Tの成長と同時に、新鮮な驚きと発見、困惑と反省の連続であった私の歩みがあることに気づかされた。（成長といえるかどうか疑わしいけれど。）そして、新米の母親の私だったが、お互いに育ち合ってきたという実感を覚える。

Tとの二人だけの母子関係がもうじき終りになると思うと、第二子を迎える前にTとの生活を記録に留めておきたいと思った。その記録から、もうじきお兄ちゃんになるTの現在の状態を考えてみたい。

一、おなかに当る

記録(一) 四月十九日 (二歳四ヵ月)

(A)朝……Tは機嫌よく起きる。ところが私の用意した

トレーナーを着ないと言いはる。私が雨戸を開けると、自分で開けるというので、私はもう一度閉める。ところがTがやろうとするとうまくいかずキーキー騒ぐ。Tの薬を盃に作り、私がスプーンで混ぜようとすると自分でするといつて聞かない。「こぼれるから」といっても聞かないので、「飲まなくてもいい」と片付ける。もうだいぶ喘鳴が収まってきたので、一度位飲まなくてもよいと思つてした行動だったが、Tは取り上げられたと思ひ、ますます怒る。私は耳鼻科に電話をかけようとする。いつもするようにTの指を持って電話のダイヤルを回させる。ところがTは途中で切つてしまう。私はTから電話を取り上げ、ひとりでかける。Tは怒つて泣く。私は外出の用意を始める。T「Tちゃんも行く」という。私「病院だから、おばあちゃんとお留守番していい」と何回も言っているうちに、「ママ、バイバイ」と納得する。

私は二週間以上も耳鳴りが続き、うっ陶しい日々だった。朝のTとのまづいかかわり方が重なつたのも、私の

イライラした気分が影響している。それにしても、とげとげしい接し方は我ながらなさげなく、恥しい限りである。母親が精神的にも肉体的にも健康であることは、子どもと接する上で基本的に大切なことである。普段子どもの要求をできる限り満たそうと心掛けているつもりだった。トレーナーを着ないというのも、雨戸を開けたがることも今日はじめたことではない。自分でやりたがったり、自己主張するのは、しばらく続いている傾向であった。いつもは余裕を持つて一歩子どもに譲れることが、今日の私にはできなくなつてしまつている。子どもと同じように張り合つていると、子どもの方も余計こだわり、ますます自己主張が強くなる。薬を混ぜることも調子のよい時は私に任せていた。電話を切るようなこともないはずだ。私はこじれないうちに、早くTの気持を受け入れて動けばよかつた。こうなつたらTと離れた方がいいと思ひ、というよりこんな自分と早くさよならするため、早く外出した方がよいと思つた。

(B) 昼食の時——Tは食べ終ると、隣の私の椅子へやつ

てきて、後に立ってトントンする。次に私の背中にベタッともたれる。舌で私の顔をなめる。キャラキャラ笑いながら。

(C)昼寝の時——私が横になっていると、私の体の上に乗る。私のおなかにトントン当る。

(D)夜寝る時——私がふとんを敷こうとすると、Tはふざけてじゃまをする。私はマットレスを私の体の前に立てていると、おなかのあたりにトントンとぶつかる。私はドーンとマットレスでTを倒すと大喜びをして、またやって来る。寝床につき、私「赤ちゃん、オギヤーオギヤーって生まれて来るよ。いい子いい子してね」と話す。Tは「赤ちゃん、オギヤーオギヤー」といって私のおなかをさする。

朝のごたごたがあった後だけに、昼からは丁寧にTとつき合おうと思ひ帰宅した。私の椅子の後でトントンすると、おなかに響くが強くTには言わない。すると、Tはベタッと甘えてくる。昼寝の時も私の上に乗る、おなかに当る。ここでも強く言わない。これまでは「おなか

の赤ちゃんいたいいたいだから止めて」と即座に制止していたが、寝る時も私のおなかに当たってくる。こうしたおなかに当たってくる行動から気づくことは、ひとつは私が一番気にして、かばっているおなか(赤ちゃん)にぶつかって来ていること、もうひとつは、決してドーンと強く当たってくる訳ではないということである。つまりTはおなかの赤ちゃんは気になる存在で、真向うからドーンとぶつかりたい気持をTなりにセーブしているのである。私の体(赤ちゃん)のことを思い抑制しているのである。そういえば、私には二階の階段を下りる時おんぶを要求しない。馬乗りも父親や祖母には強く求めるが、私には私が四つん這いになっている時そっと乗ってくるだけである。そして、この頃目立った行動、つばをジュータンやおもちゃにかけたり、汚れた手で家族の体や洋服にわざわざぬぐったりするのも、抑制で萎縮した分を自分を外へはき出している、そんな気もするのである。また、これまで大好きでよくいっしょに遊んだ熊のぬいぐるみを、「ペン」といって叩き、その後すぐ「い

「いい子、いい子」となでている。この行動も「かわいい」という気持と何か屈折した思いが共存しているTの心を表現しているようにも思える。

二、「ママ遊ぼう」

記録(一) 四月二十五日

。午前中は近くの公園で、午後は私の用事でおじゃました近所のお宅の庭で、二歳〜五歳の子ども達に混じっ

てTは遊ぶ。

。夕方、私いつものように電車やバスのおもちゃを畳の上で走らせて遊ぶ。Tはお気に入りのバスを動かす。私には同じ大きさの別のバスを、自分のバスに寄り添うように、同じように動かすことを要求する。その通りにするとTはうれしそうである。またTは畳のふち布の上を大好きな電車を走らせる。私は踏切の棒を上げ下げする役をやらされる。遊びはしばしば続く。Tは眠そうになる。私は急いで夕食やお風呂の用意をしなくては



と思う。理由を話して私が立とうとすると、ひどくいやがる。お手洗いに行くこともいやがる。「ママ遊ぼう」と引つ切りなしに言う。

。隣の男児が道でサッカーボールをしているのが見える。Tはうれしそうに見ている。しかし私がその場を去ろうとすると、私に「いっしょに見よう」と、私がそばに居ることを求める。

。私は夕食の野菜を取りに庭に出る。Tも追って来る。空を見上げると月が出ている。T「お月さん、こんばんは」という。ポケの花が数輪咲いているのに、はじめて私は気づく。夕空に飛行機がとんでいく。

天気の良い日はできるだけ外に連れ出すようにしている。近所の公園には、午前中はTと同年齢の子ども達も来る。夕方昼寝が終わってから小学生もいて、Tは小学生に混じって遊ぶ。しかし子どもがひとりもいない時もあり、そんな時は私もTも何か遊びが乗らない。Tは「ママ遊ぼう」と私を相手に砂場やブランコやすべり台をする。私にTと同じようにブランコ、すべり台をする

ように求め、私も体にさわらない程度に従う。ところがひとたび子どもが来ると、Tの動きは変わる。時おり私を確認しながら、その子どもと動き出す。特定の友だちがいる訳ではなく、いつも顔ぶれは変わる。しかし、だれであっても顔ぶれは変わる。しかし、だれであっても一緒にいて遊ぶことは楽しいようである。相手があまちなじみのない同年齢の子どもであると、砂場でおもちゃの取りっこをしても、ひどいトラブルにはならない。砂場遊びもそれぞれ淡々としている。ところが、親しい間柄の子どもの場合はちがう。最近一番変わったのは、隣の男児Mとのかかわりである。三月頃までは、家に遊びに来てくれたり、公園で会うと大喜びでついでまわり、Mの言うことなすことをみんなまねをして大はしゃぎだった。ところが今は、Tの方がちょっとかいかけて叩いたり、つねったりする。MがTのものを持っていると、取りかえそうと躍気になる。Mも取られまいとする。以前ならば遊びになっていたものが、トラブルになってしまふ。結局Tが泣き出し、せっかく遊んでくれようとし

ているのに、Mはそそくさと去って行く。「なぜかしら」とTの変化をMの母親に尋ねてみると、「(Tが)お兄ちゃんになるからでしょう」という答えが返ってきた。体験上言えることなのだろうか。確かにちよつとしたことですぐいさかいになるのは、兄弟げんかのようなものである。

Tが生まれから、MはTを弟のようによく相手にしてくれた。親しさが増してくると、MはTに対して年少者の扱ひではなく対等のように体をぶつけ合っていた。私もTとかかわりながらも、Mとよく遊んだ。Tにとって親しいその子どもは、私にも親しい間柄で、それが気になる存在になってきたのだろうか。

大好きな電車と、バスがあり、寝る時も枕元に置いて寝る。自分以外の人がやたらに動かすと怒る。これらのおもちゃを床や畳に寝ころがって走らせる遊びは、ずーと続いている。最近では、まっすぐな物やまっすぐな所を見つけると、それに沿って走らせる。たとえば、ものさし、自分の箸、マットレス、レール、壁の下、家具のふち、ジュータンのふち等である。自分だけの思い通りに

動かす電車やバスは、自分と同等のもののように思えるが、こんなにもまっすぐな物に沿って、まっすぐ走りたいという欲求はなんだろうと不思議に思う。ひとりで遊ぶことが多いが、記録のように私を誘う時もある。そんな時は私はTの言う通りに動く。同じ大きさのバスを、Tのバスとびったり同じように動かしたり、Tの電車が通る度に踏切の操作をする。私がTの言う通りに動くとTは満足そうである。私もTだけとゆっくりつき合う時間もこれから少なくなるだろうと思ひ、腰をすえてつき合う。私がつっかりTの方を向いてくれることは、Tにとって快いことだろう。それ故、私が少しでもその場を去ろうとすると強くいやがった。前述のMが外にいる時も、以前なら私に構わずMとかかわっていただろうに、この時は私にそばにいてくれるように求める。

Tの気持を受け入れれば夕食の用意はできない。私はうす暗くなった庭にそつと野菜を取りに出る。Tも後を追う。小寒い外気に触れ、閉ざされた空間から無限の空間に解き放されたような気がした。私の窮屈な思いも消

え失せた。高く空を見上げると、遠くにお月さんと飛行機が見えた。何とも言いがたい平安な雰囲気包まれ、Tも私もしばらくその空気に浸っていた。Tは眠気がふつとび、私は家に入って新たな気分夕食の用意に取りかかれた。

以上二つの記録をもとに、Tの最近の様子を考えてみた。まだ目に見えないけれど、赤ちゃんの存在がTの心に影響を与え、私や親しい子どもとの関係に波及していることが察せられた。こうしたTの思いを受け止め、お産の入院やその後の育児にも配慮したいと思うこの頃である。

さて、このシリーズに登場した方々の文章を読むと、その人らしい子どもの見方、接し方があることに気づく。私は日々の子育てで心掛けていることは、記録をつけておくことである。これは私が学生で実習生だった頃からの習性になっている。毎日欠かさず書く訳ではない。特に子どものことで印象に残った出来事、楽しそうに遊んでいる場面、はっと成長の芽に気づかされたこと

は、書き留めておく。子どもの身近にいるものとして、子どもの世界をかいま見せてくれることは楽しいことである。また、子どもの成長と共に、遊びも深まっていくのを見るのもうれしいものである。また、子どもの寝た後、ゆっくり日中の私の接し方を反省するために記録を書くこともある。まずいかかわり方をした日、またひどく感情的にふるまってしまった日などは、心安らかに寝れない。自分がその動きの渦中で何を感じてそうしたのかを文字に書きながらはき出す。冷静に客観的に自分をふりかえてみると、動いていた時には気づかなかつた子どもの動きや心が見えてくることもある。どうして子どもはそんな行動をとったのか、またその行動の意味は何なのか、その時点でいつも納得できる答えが思い当るとは限らない。しかし、その時自分が何を思い感じて動いていたかは迎えるはずである。そして翌日からの接し方を工夫する手立てになる。Tが一歳すぎの頃から、私との関係でいやなことがあると自分の頭をドアや床にゴツンゴツンぶつける行動をし始めた。私に直接ぶつけて

こないこの行動は、私に背を向けた態度として受けとれた。この行動は三ヶ月以上続くが、幾度となく対応の仕方を考えさせられ、試行錯誤の連続だった。この気になる行動に対し戸惑いを覚えながらも、気持のぶつかり合いをするうちに、新たな状況が展開していった。そして、この過程を経て、Tと私が細かく気持を通わせ合うことができたと思う。こうした積み重ねが私の歩みであったと思う。印象深い出来事や楽しい遊びの記録、また困惑と反省の記録を、なかなかゆっくりと読み返す時間のゆとりがない。しかし、今まで何人ともなく出会ってきた子ども達との間で生まれた記録は、私の貴重な財産、宝物である。

記録二の最後の場面で庭に出て上を仰いだ時、Tも私もほっと解放された体験は、印象深い。あれかこれかの選択ではなく、無条件にパッと新しい世界が開かれ、Tも私も全く新しい気分になった。子どもと生活していると緊迫感もあるが、しかしある時予想もしない形で状況が好転することがある。何がどうしてという理由がつか

ない。生活自体がそういう要素を含んでいるのだろうか。子どもと生活を共にしていると未来が拓かれるということは、育つ力に託せる、委ねて生きることが保証されていると信じているからであろう。これは、私たち人間が自分で生きているのではなく、生かされている存在であることにも通じる事柄である。

もうじき第二子が誕生する。倉橋惣三先生が言っておられるように、その子どもにとって私はまた新しい母親の誕生である。子ども達と共に歩む良き母親の成長があるらんことを祈りつつ……。

地下鉄に乗った。私のつれは、アメリカ人の友人と彼女の10歳になる娘だ。地下鉄は駅に止まり、あわただしく乗客の乗り降りがなされ、やがて、再び車中に元の落ち着きがもどった。立つ人のない車内の中央に、黒い定期入れがポツンと取り残こされているのがわかったのは、そんな時だった。座わっている人々の視線がいつせいに注がれるや否や、私の隣りに座わっていた娘は、持っていたカバンを床に投げだし、それをつかんだ。そして、

「私、次の電車で行くから、先に行つてね」

と、私達の方というと、パッと地下鉄を飛び降り、落し主らしい女性の後を追った。娘が降りるとすぐ、ドアは静かに閉まり、地下鉄はゆっくりとホームを離れ始めた。窓からは、一生懸命話をしてる娘の後ろ姿が見えた。

ほんの数秒の、でき事だった。来日し

てまもなく、日本語のほとんどしゃべれぬ娘を残して地下鉄は動き始めた。娘の母親である私の友人は、地下鉄がホームを離れる時、ちらっと娘の方を向いたが、動き出してから、何事もなかったように、私との会話の続きを始めた。心配そうにしている私に向かって、「大丈夫よ」と、娘を信頼しきった声でいった。

娘は次の地下鉄でやって来た。落し主は見つからなかったとかで、手には、黒い定期入れが握られていた。私は、娘をつれて、駅員室に行き、わけを話すと、「持ち主から、お礼の電話をさせますから、電話番号と名前を書いて下さい。」と、メモ用紙をわたされた。娘は、ペンに力をこめて書き付けた。書き終わると満足そうな笑顔と共に、それを駅員にわたした。

「きつと電話あるわよ」というと、娘は再びニコツとした。私も一緒にニコツとした。

(管)

幼児の教育 第八十四巻 第九号

九月号 ①

定価三五〇円

昭和六十年八月二十五日 印刷

昭和六十年九月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

私立幼稚園の昭和史

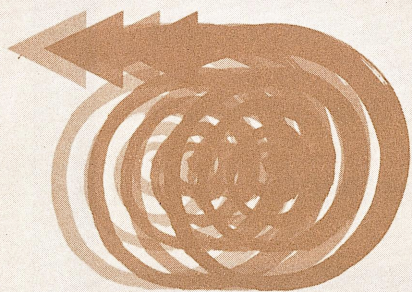
こぼればなし

青柳義智代・著

私立幼稚園の歴史を語り、隠れた
エピソードをも今ここに明かす！

私立幼稚園の昭和史

青柳義智代 著



私立幼稚園の発展のために生涯をつらぬいてきた著者は、即日本の私立幼稚園の歴史であることは万人の認めるところです。本書は、その歴史を振り返るとともに、表面化しなかつたさまざまなエピソードをまじえて事実を綴っています。私立幼稚園の発展を理解する上で重要な書です。

B5判・128頁・定価 1,300 円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

障害児保育実践シリーズ

〈全6巻〉

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

- 第1巻 / 自閉的な子どもと保育
- 第2巻 / 発達に遅れのある子どもと保育
- 第3巻 / ことば・聞こえ・見ることの障害と保育
- 第4巻 / 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
- 第5巻 / 心に問題をもつ子どもと保育
- 第6巻 / 障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

- ♣ いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。
- ♣ 症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。
- ♣ このシリーズでは、実際例をたくさん出しあつて、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。
- ♣ また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。
- ♣ たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。
- ♣ 豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館